
日本テレビ

『芸能 BANG ザ・ゴールデン』に関する意見

放送倫理検証委員会

委員長	川端 和治
委員長代行	小町谷育子
委員長代行	吉岡 忍
委員	石井 彦壽
委員	香山 リカ
委員	是枝 裕和
委員	重松 清
委員	立花 隆
委員	服部 孝章
委員	水島 久光

目 次

はじめに	演出か、時間泥棒か	1
審議の対象とした番組		1
視聴者からの批判と日本テレビ内の波紋		3
本件放送の企画から放送までの経緯		4
制作者は演出手法をどう認識したか	「誤解」と「行き過ぎ」	5
不適切な演出手法の根源へ	故意と、その先にある裏切り	6
委員会の判断		9
おわりに	第4の裏切りについて	10

はじめに 演出か、時間泥棒か

テレビは、時間のメディアである。新聞や雑誌のように、パラパラッとめくって、面白そうなところだけ目を通す、ということができない。番組を見始めた視聴者は、番組が終わるまでの時間をテレビに拘束されている。その代わり視聴者には、CMのあいだなどにチャンネルをザッピングして、別の番組を見る自由がある。

テレビのこうした特性を放送局や番組制作者の側から見れば、とりわけバラエティー番組などの場合、視聴者の関心の高いテーマやゲストを揃えることと並んで、番組の演出・編集にあれこれ工夫を凝らし、視聴者にザッピングの気持ちを起こさせないで最後まで見てもらうことが腕の見せ所となる。

CMに入る直前、司会役やナレーションが「このあとすぐ!」「このあと××の秘密大公開!」等々と煽って視聴者の関心を引き延ばす「CMまたぎ」の手法は、昔からいろいろ工夫されてきた。放送技術の進展した近年は、番組の見せ場の映像や音声を加工し、あらかじめ短時間だけ見せる「Qショットスーパー」(「Q」は「cue = 合図、指示」の当て字。「Qショット」とも略称)、画面の隅に見出し風の短文を表示しつつ視聴者の興味をつなぎ止める「サイドスーパー」も多用されるようになった。

だが、これらがあくまで中身を引き立たせるための演出手法に過ぎないことは、制作者の常識だろう。肝心の中身が見かけ倒しであったり、眉唾であったりすれば、小手先のあざとさだけが目立ってしまう。羊頭狗肉はいけない。ワインと称して酢を売るといったことは、テレビにかぎらず、あらゆる商道徳に反している。

テレビがそんなことをすれば、視聴者は「裏切られた」「時間泥棒だ」と怒り出すだろう。これこそ、時間のメディアとしてのテレビが視聴者に呼び起こす感覚的反応である。

制作者はこうした手法が持つ危うさに自覚的でなければならぬが、ここには放送倫理に絡めて、あるいは番組制作姿勢にかかわって、いくつも考えなければならない問題がひそんでいる。

審議の対象とした番組

日本テレビ放送網株式会社(以下、「日本テレビ」という)は2012年5月4日19時から2時間枠のバラエティー番組「芸能 BANG ザ・ゴールデン」(以下、「本件放送」という)を放送した。これは、週1回の深夜帯に「芸能情報をバラエティー手法で取り上げる新感覚芸能ゴシップ番組」をコンセプトに放送してきた番組を、大型連休中のゴールデンタイムに持ってくるという、担当の制作者にとっては大抜擢の編成であった。

日本テレビは新聞各社のラテ欄（番組表）に提供した番組情報において、その内容を次のように告知していた。

《緊急放送！芸能バン占い離婚渦中のアノ人記者軍団と激突SP！！今夜ついにスタジオへ...オセロ中島騒動の占い師が謎の同居生活全貌激白 極悪拝み屋に5億円欺き取られた大物H...（以下、略）》

本件放送の最大の目玉は、この告知が冒頭に掲げていたように、この時期、芸能分野のニュースで大きな話題となっていた「オセロ中島騒動」だった。

オセロ中島は、女性2人のお笑いコンビ「オセロ」の一方の通称だが、最近では体調不良、レギュラー番組の降板、自宅や個人事務所の家賃滞納などが伝えられてきた。しかし、彼女がIという女性霊能者（以下、「I占い師」という）と同居中で、マインドコントロールを受けている等と報じた週刊誌報道をきっかけに再び注目が集まり、「2012年上半期、芸能界を一番騒がせ、話題となった」（本件放送前半にあるナレーション）。

*

ラテ欄の告知によれば、本件放送は、オセロ中島と同居していたI占い師が初めてスタジオ出演し、謎に包まれていた同居生活の全貌を語る、というものだった。少なくともこれを見た視聴者が、そう受け取ってもおかしくない事前告知が行われていた。

番組は、司会陣のほかに、タレント、芸能人、芸能ジャーナリストらのトークに事前編集のVTRをまじえて進行していくが、番組冒頭のナレーションも「今夜ついにスタジオへ。オセロ中島騒動の占い師が謎の同居生活全貌を激白」とセンセーショナルに盛り上げ、別の話題がつづく前半の画面にも同趣旨のサイドスーパーが表示されつつけていた。

番組が始まっておよそ44分後、CMまたぎのナレーションが「このあと、オセロ中島騒動、同居占い師がついに登場。衝撃の告白に、スタジオ騒然」と煽り、出演者のひとりが「占い師に対してはね」と語るQショットが流れる。その後、15秒間ずつ6本のCMが放送されたあと、再びナレーションが「オセロ中島騒動の占い師がついにスタジオに。衝撃の告白」と繰り返した。時刻はそろそろ夜8時、視聴者のザッピングが増加し始める時間帯だった。そこに山場を持ってくるのは、いま見ている視聴者を逃がさず、他局の番組を見ていた視聴者を引き寄せる常套的手段である。

だが、番組開始約47分後、スタジオに現われたのは、騒動の渦中で注目を集めていたI占い師ではなく、S（本件放送では実名）という女性占い師だった（以下、「S占い師」という）。司会役の女性タレントの説明によれば、S占い師とは、「中島さんとの共同生活、同居生活で騒動となった、自称占い師のIさん。そのIさんと、Iさんが中島さんといっしょに住まわれる前に、いっしょにIさんと住んでいらっした方」である。

その後、S占い師とスタジオ出演者とのやりとりが十数分間にわたって繰り返され、サイドスーパーには「今明かされる衝撃の事実」「謎の同居生活…全ぼうを激白」等々と表示されるが、どれもS占い師宅にかつてI占い師が居候していた際の見聞や体験の話であって、ラテ欄の告知やナレーションやサイドスーパー等が、オセロ中島と同居していたI占い師がスタジオに初出演し、オセロ中島との謎の同居生活について激白する、と繰り返し煽った内容とはおよそ似て非なる内容だった。

結局、I占い師は最後まで登場しなかった。

視聴者からの批判と日本テレビ内の波紋

本件放送を見た視聴者からは、すでに放送中から日本テレビに苦情や抗議が殺到し、その数は約2000件にのぼったという。BPOにもメールや電話やファックスによる多くの意見が寄せられたが、そのすべてが本件放送の番組告知や演出手法が視聴者をあざむく不適切なものである、と日本テレビを強く批判する内容だった。

委員会はこうした視聴者意見を受け、日本テレビに対して、本件放送の企画意図と、企画・制作から放送に至る経緯がどのようなものであったか、視聴者から強く反発されるような演出手法がなぜ採られたのかの報告を求めた。

日本テレビからは放送直後から7月上旬までのあいだに、制作局バラエティーセンター担当CP(チーフプロデューサー)、制作局長、コンプライアンス推進室長からの合計3通の報告書(内容に重複があるので、以下、一括して「報告書」という)のほか、本件放送後に全社的規模で立ち上げられた「番組制作向上委員会」(委員長は代表取締役社長)での代表取締役社長の発言記録、緊急に開催された制作局コンプライアンス研修の記録等も提出された。

企画意図や制作経緯については後述するが、これらで語られている本件放送に関する見方は、一様に否定的・批判的なものだった。例えば、チーフプロデューサーは「結果として視聴者をはっきりさせるような演出を選択してしまったことは、番組制作者として遺憾に思います」と述べ、制作局長は「残念ながら視聴者に誤解を与えてしまいましたが、根本的には行き過ぎた演出手法の問題」と言い、さらに代表取締役社長は「視聴者を誤解させ、不愉快にさせた。娯楽番組としては、それだけで失格ではないか」と語っている。

また、制作局コンプライアンス研修の場でも、他番組の制作者から「親戚や友人から『日テレはもう見ない』と言われ、情けないと思った」「今回のようなせこい手法では、高視聴率は取れない。中身をきちんと作ることを考えるべきだ」旨の疑問がいくつも投げかけられる一方、若手や中堅の制作者からは「この種の問題は他の制作現場にとっても無縁でない」「今後は小手先の演出手法を学ぶより、中身をどう充実させる

かを考えたい」といった趣旨の意見が率直に語られていた。

これらからうかがわれるように、本件放送は特定の番組の告知や演出手法をめぐる議論を超えて、同社の番組制作全般を見直す動きとして大きな波紋を広げていくことになった。以下ではまず、本件放送の企画から放送までの経緯を概観し、その過程で制作者が今回問題となったような演出手法を採るに際し、どのように認識していたのかを見ていくことにする。

本件放送の企画から放送までの経緯

日本テレビの報告書によれば、本件放送は概略、次のような経緯で制作・放送された。ここでは、問題となった「オセロ中島騒動」に関する部分についてのみ摘記しておく。なお、これらの作業を実質的に担ったのは、同社制作局バラエティーセンターの番組担当チーフプロデューサー、プロデューサー、総合演出ら4人の幹部制作者であり、折々に制作会社のプロデューサーやディレクターが加わっている。

(1) 2012年3月26日 本件放送の制作方針の決定

本件放送が5月4日のゴールデンタイムに編成されることが決まったことを受け、「オセロ中島騒動」を中心に、芸能人と占いの関係をテーマに展開する制作方針が立てられた。オセロ中島、I占い師に加え、かつてI占い師と同居したことがあるS占い師の3人のキャスティングが考えられたが、早い段階でオセロ中島の出演は不可能と判断。I占い師についても、仲介者を通じて接触を試みるなどしたが、はかばかしい進展はなかった。

(2) 同4月13日～16日 S占い師にスタジオ出演交渉

制作者らは2度にわたってS占い師の事務所を訪れ、スタジオ出演を依頼。以前、S占い師は他局番組にVTR出演したことがあったが、スタジオに出演して、かつての同居中の事実だけでなく、どんな気持ちだったかを率直に語ってほしい旨を説得。2度目の交渉後、事務所から出演了承の連絡を受ける。

(3) 同4月25日 日本テレビKスタジオで番組収録

S占い師がスタジオで語った内容について、総合演出は「体験者でしか語れない熱のこもったスタジオ展開になった。(中略)是非、多くの視聴者に見て頂きたいと思った」と語っている。なお、このときの収録台本には、まだQショットやサイドスーパーなどのこまかな演出手法は記されていない。

(4) 同4月26日 素材テープのチェックと編集方針の確定

総合演出がスタジオ収録の素材テープを見て、S占い師の証言を軸にした構成を立案。制作者間で検討し、I占い師は「自称占い師」、S占い師については「占い師」と呼び分けることにする。ただし、Qショットやサイドスーパーでは曖昧に「オセロ中島騒動 同居占い師」と表示することにした。「(I占い師が登場する、と)誤解を生じる人がいても、番組を見て頂くことで(中略)受け入れてもらえると考えていた」という。

(5) 同4月29日～30日 粗編集した内容をチェック

この前後、総合演出がラテ欄用の番組告知を作成。チーフプロデューサーとプロデューサーも「本編を見れば(I占い師とS占い師が)違うことがわかるはずだから、あくまでラテ欄に関しては、このぐらいまでは許容範囲ではないか」と判断・確認し、その告知用原稿を追認した。放送尺を調整しながら、素材テープを粗編集した内容をチェック。また、サイドスーパーなどにどんな文言を使い、どのタイミングで入れるかについても話し合われた。その際、この流れでは、S占い師が登場したところで視聴者からガッカリされるのではないかと、といった疑問も呈されたが、「見てもらえば大丈夫」との意見が大勢を占めた。

(6) 同5月1日～4日 編集作業・ナレーション録音・仕上げ作業

チーフプロデューサーらが白素材(Qショットやサイドスーパーなどを入れる前の粗編集をしたスタジオ収録等の映像)をチェック。その後、ナレーションを収録する一方、総合演出が作成した原稿に基づいて、Qショットやサイドスーパーを入れるなどの仕上げ作業が行われた。

(7) 同5月4日午後～夜 完成～プレビュー～放送

午後2時半、完パケVTRができ、制作局でプレビューが行われた。終了したのは放送2時間前だった。午後7時、本件放送が始まった。

制作者は演出手法をどう認識したか 「誤解」と「行き過ぎ」

上記の制作経緯からも明らかなように、制作者は「オセロ中島騒動」を番組の中心テーマに据えながら、当のオセロ中島とI占い師を欠いたまま番組を成り立たせなければならなかった。

出演を了承してもらったS占い師はこの2人とまったく無関係というわけではなかったが、注目を集めている「騒動」の当事者ではなく、知名度や話題性の面でも比較

にならないことはわかっていた。とはいえ収録の場で彼女が語った話はそれなりに面白く、内容のあるものだった。

報告書はこの段階で制作現場で考えられたこととして、「登場するゲストがS占い師とは特定出来ない告知スーパーやQショットを多用するという手法が、総合演出により創出されました」と説明している。これがつまり、謎のI占い師が出演する、と視聴者の期待を煽り、引っぱりながら、実際にはS占い師を登場させる演出手法であった。

制作者はこの間の経緯を、「誤解」と「行き過ぎ」という言葉をたびたび使って、次のように説明している。

例えば、「(I占い師がスタジオに登場する、と)もし誤解を生じる人がいても、番組を見て頂くことで(中略)受け入れてもらえると考えていた」「もし誤解して番組を見た方がいたとしても、番組を見ていただければ、(中略)必ず満足していただけるはずだと確信していた」等々とある。報告書中、このような文脈で使われる「誤解」は18回登場する。

だが、「(心底1人でも多くの視聴者に楽しんでもらおうという)思いが強すぎて行き過ぎてしまった」「見てもらうに値する番組を制作し、なるべく多くの人に見てもらいたいという熱い思いが行き過ぎ、本末転倒の結果を生んでしまいました」。報告書には、同趣旨の「過度の演出」等を含めると、「行き過ぎ」を表わす言葉が10回以上出てくる。

不適切な演出手法の根源へ 故意と、その先にある裏切り

委員会は今回、本件放送の制作者をはじめとする日本テレビ関係者が、不適切な演出手法が採られるに至った理由や経緯をどう認識しているかについて、本件放送の録画DVDと報告書で語られている説明とを繰り返し照らし合わせながら検証を進めた。

率直に言って、制作者の言うような「(I占い師が登場する、と)もし誤解して番組を見た方がいたとしても、見てもらえば、必ず満足してもらえる」と確信していた」「(心底1人でも多くの視聴者に楽しんでもらおうという)思いが強すぎて行き過ぎてしまった」という説明には首を傾げざるを得なかった。

こうした説明と本件放送の内容とのあいだには、大きな落差がある。しかもその懸隔ゆえに、テレビと視聴者との関係、制作者と出演者との関係、制作者同士の関係や制作者の自己意識など、本件放送が問いかけている数々の問題が見えなくなっているのではないかと私たちは疑問を抱いた。

以下、ひとつひとつを見ていきたい。

(1) 過失か、故意か

制作者は、また周囲の関係者は、本件放送をもう一度、最初から終わりまできちんと見てほしい。

何度見ても、I 占い師が登場する、と視聴者に「誤解」させるようにしか作られていない。ラテ欄も、ナレーションも、サイドスーパーも、Q ショットもすべて、話題のあの I 占い師がスタジオ出演する、という一点に向かって構成されている。自称占い師と実際の占い師を呼び分けるという約束事もどこへやら、一分の隙もなく、きっちり、くどいくらいに視聴者がそう思うように仕向けている。ここには一から十まで、制作者の故意が働いている。

その結果として視聴者が、この番組のどこかできつと I 占い師が登場するだろう、と考えたことは、誤解とは言わない。これこそまさに、制作者が狙ったとおりの正解だった。

それをなぜ、「もし誤解して番組を見た人がいたとしても」などと、迂闊にもその可能性を見落としていた、と言わんばかりの口調で語るのだろうか。あるいは、そこで採られた演出手法が単なる「行き過ぎ」の、あたかも過失でもあったかのように説明されるのか。

委員会の席上の発言をそのまま引用すれば 故意にやったことを取り繕おうとして、バカを装っているんじゃないか？

ガラが悪い、と顔をしかめないでいただきたい。ここは大事なところだ。

放送倫理は、ヤラセや捏造のように、ある意図を持ち、故意に行ったことについては真正面から問うことができる。だが、過失や不注意や事故による不祥事の場合、倫理的な問題にはなりにくい。実際は、まったくそんなことはないのだが、一部にはそのように考えられている節もないわけではない。

本件放送の制作者はそのことをわかっていて、だから、自分たちは視聴者を故意に騙そうとしたのではないし、まさか多くの視聴者がそんなふうには誤解するとは思ってもよらなかった、と過失や迂闊であったことを装い、ことの重大性を軽く考えようとしているのではないか 私たちは本件放送を何度も見て、そう考えないわけにはいかなかった。

もしほんとうに制作者が「視聴者が誤解するとは思わなかった」と考えていたとすれば、その人間を見る目、視聴者とのコミュニケーション能力、プロの表現者として持つべき他者への想像力にかなり問題があると言わなければならない。

これは放送倫理というより、職業適性の問題となるが、もちろん私たちはそのような不適格な制作者がいるとは思いたくない。だからこそ、故意の問題にこだわるのである。制作者は最初から視聴者を騙そうとした、そして、そのためにさまざまな演出手法を駆使したのだろう、と。

私たちは制作者に、なぜそのような演出手法を採ったのか、虚心に振り返っていただき、と思う。

(2) 視聴者への裏切り

「行き過ぎ」という言葉遣いにも、違和感があった。

行き過ぎとは、目的地を越えて通り過ぎること、度を超して対象に関与することだが、この言葉には、しかし、方向性は間違っていなかった、と弁解するニュアンスがある。体罰教師が「愛情はあった。ただ教育熱心のあまり、行き過ぎてしまった」と取り繕うときに口にする、あの言いまわしである。この弁解が見苦しいのは、口で言うほど肝心の子供の姿が見えていないことがミエミエだからである。相手の姿が目に入っていないとき、行き過ぎは目的地も対象もメチャクチャな、単なる暴走になる。

テレビが目的地とし、対象とするのは、もちろん視聴者である。制作者は視聴者に向けて番組を作り、視聴者にしっかり届けることを仕事にしている。

本件放送の制作者が、行き過ぎだった、と言うとき、視聴者の姿をきちんととらえていたか、視聴者に対する愛情や敬意はあったのだろうか。体罰教師が口にする程度の愛情であれば、それは、少し露骨に言うと、視聴者に対してタカをくくり、ダシに使って数字（視聴率）を稼ごうとした、ということではないか。そういうものは愛とは言わないし、視聴者にていねいに向き合っていたとも言わない。

そこにあるのは、視聴者に対する裏切りである。

(3) 出演者への裏切り

本件放送はさまざまなものを裏切っている。視聴者への裏切りはもちろんそのひとつだが、裏切りはそれだけではない。

本件放送では、放送台本なり進行表を手にした司会陣を別にすれば、出演したタレント、芸能人、芸能ジャーナリストらも騒動の渦中のI占い師がスタジオに登場する、と思っていたにちがいない。それとは別人のS占い師が現われたときの、一瞬、「アレッ？」と戸惑った様子が画面には映っている。

一人ひとりプロだけに、その後のS占い師をまじえたトークはそつなく盛り上げていくが、本件放送が「今夜ついにスタジオへ。オセロ中島騒動の占い師が謎の同居生活全貌を激白」と言いつづけ、I占い師が登場すると煽ってきた流れについて、巧みに笑い飛ばすなりして視聴者を唸らせ、娯楽として納得させるようなことまではしていない。

というより、それは事実上、無理だった。本件放送の制作経緯で見たように、この段階ではどのようなナレーションやQショットやサイドスーパーがつけられるか決まっていなかった。あらかじめどんな構成の番組になるのか、どんな編集がされるのか

の大筋くらいわかっていなければ、出演者としても対応のしようがない。

同じことは、出演したS占い師についても当てはまる。かつてI占い師が自宅に居候していたときの体験を一生懸命語っているのに、まるで当て馬のように扱われている。話が具体的で、面白いとしても、番組全体を見れば、そのような役柄にはめ込まれている。

本件放送は多くの出演者にも、裏切られた、という感情を抱かせる、後味の悪い仕事だったのではないだろうか。

(4) 他局同業者への裏切り

どのテレビ局も、5月のゴールデンウィークさなかのゴールデンタイムにどんな番組を放送するか、知恵を絞っている。制作者も一生懸命考え、幾晩も徹夜までして番組を作り、どれだけたくさんの視聴者に見てもらえるだろうか、と神経をすり減らしている。

2時間枠の本件放送の平均視聴率は、12.8%だった(関東地区)。他局の番組は時間枠の取り方が異なったり、ずれていたりするので一概に比較はできないが、これがトップか2位の高視聴率だったことは間違いない。騒動渦中のI占い師がスタジオ出演する、と大々的に煽った本件放送は、数字を見るかぎり、当たりだった。

しかし、出る出る、とセンセーショナルに盛り上げ、膨大な視聴者を惹きつけ、強引に引っぱりながら、結局、I占い師は出なかった。出ないことがわかっていて、放送した。これは、フェアな競争と言えるだろうか。「それって、アリか？」という声が聞こえてきてもおかしくない。これは、同業の他局と他局の制作者に対する裏切りでもあった。

委員会の判断

委員会は2009年11月、委員会決定第7号として、「最近のテレビ・バラエティーに関する意見」を公表した。そこで私たちは、バラエティー番組について、バラエティーは何でもありだ、常識を覆すようなことをやって、広範な視聴者とのあいだに共感と共振のコミュニケーション空間を作り出し、閉塞した世の中の空気を大胆に変えるような挑戦をしてほしい、と期待を語るとともに、制作者は何をやるにせよ、みずからの内的必然性や表現意欲が視聴者にもきちんと伝わる「確信犯」たれ、といささか挑発的に激励した。

本件放送の制作経緯と内容を見ると、制作者が視聴者に、I占い師がスタジオ出演すると誤認させるよう、さまざまな演出を加えていることがわかる。その意味では、確信犯である。だが、それは多くの視聴者とのあいだに共感・共振を巻き起こすどこ

るか、視聴者の興味や期待をトリッキーな番組告知や演出手法でかき立て、無理やり引っぱり、最後には裏切って、強い反発を招くものであった。

制作者が、自分がかかわって制作した番組を多くの視聴者に最後まで見てもらいたいと考えるのは当然であり、そのためにさまざまに演出手法に凝ることもまったく当たり前のことである。

しかし、本件放送のように衆目を集めている人物を主たるテーマにし、その人物が出演しないことがわかっていながら、出る出ると手を変え品を変えて煽っておいて、最後に何のオチも工夫もないままに、全然ちがう人物を登場させるのは、羊頭狗肉そのものである。いかに何でもありのバラエティーとはいえ、委員会はこれについては、わざわざ放送倫理を持ち出すまでもなく、非常識だと言わざるを得ない。

視聴者との信頼関係は、放送の存立基盤そのものである。放送人の使命も放送倫理もそこを土台にして生まれてくる。その信頼関係を裏切るとは、放送事業それ自体を崩壊させることにもなりかねない。

NHKと民放連が定めた「放送倫理基本綱領」は、「放送は、適正な言葉と映像を用いると同時に、品位ある表現を心掛ける」ことを求めている。また、民放連の「放送基準」も「ドキュメンタリーや情報系番組においても虚偽や捏造が許されないことはもちろん、過剰な演出などにならないように注意する」(32項)としている。

委員会は、本件放送が、ラテ欄での告知と、番組中のナレーションやサイドスーパ―などにおいて不適正な言葉を多用し、過剰な演出によって視聴者をあざむくなど、放送倫理に反したものであったと判断する。

おわりに 第4の裏切りについて

先にも触れたように、日本テレビは本件放送が問題化したことを受け、代表取締役社長を委員長とする「番組制作向上委員会」を設立し、番組制作全般を見直す大がかりな改革に乗り出している。

これには、やはり委員会が審議した2012年4月放送の『news every.』の「食と放射能 飲み水の安全性」報道、2011年1月放送の『news every. サタデー』の「ペットビジネス最前線」報道と、不祥事が相次いでいたという事情もあったにちがいない。制作部局がちがうとはいえ、1年余りのあいだに3件の不祥事というのは過去に例がなく、関係者一同の危機感と覚悟のほどもひしひしと伝わってくる。その改革に向けた決意と全社的な体制の構築の努力については、委員会としても高く評価したい。

しかし、当たり前のことだが、その改革の方向性も内容も、すでに犯してしまった失敗をどのように総括するかは規定される。その原因を正確に、深く把握しなければ、

再発防止策も全般的な改革も的外れのものになる。私たちが本件放送の実際の内容・演出手法と制作者の認識・説明の落差に着目して検証したのも、関係者が今回の不祥事の真因を直視し、たしかな改革へと結びつけてほしいと願うからであった。

最後にひとつ、大事なことを指摘しておきたい。私たちは本件放送の制作者の認識・説明が実際の放送内容とかけ離れ、不適切な演出手法を採った動機を過失や迂闊の側にずらしていることを指摘したが、このことは別の言い方をすると、制作者が自分自身を裏切っているということである。自分がやろうとしたこと、やったことから目をそらし、意味や意図を変えてしまう。これは、視聴者、出演者、他局同業者に対する裏切りにつづく第4の裏切りである、と言わなければならない。

ものを表現し、ものを作る人間がみずからを裏切ったら、クリエイターとしての存在の根拠を失ってしまう。これはまたせつかくの改革の方向性と内容をゆがめもするだろう。それは制作者や日本テレビにとってだけでなく、日本の放送文化にとっても大きな損失となる。

委員会は今回、故意や裏切りなどと、人間の情動に強く結びつく言葉を使いながらこの意見書をまとめた。それは、放送で失ったものは放送で取り返すしかない、放送の自主・自律を貫くのも制作者一人ひとりの努力である、という私たちの信念を、本件放送の制作者と、改革さなかの制作現場の一人ひとりの胸の内に届けたいと考えたからであった。どうかここに込めた私たちの思いを汲み取っていただきたいと思う。